五番町夕霧楼

水上　勉

角川文庫

角川文庫

五番町夕霧楼（ごばんちょうゆうぎりろう）

昭和四十一年二月二十八日　初版発行
昭和五十四年五月三十日　二十三版発行

定価は、カバーに明記してあります

著作者　水上勉（みなかみつとむ）
発行者　角川春樹
印刷者　橋本伝四郎
市川市湊新田六十一

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
〒一〇二　株式会社角川書店（かどかわしょてん）
東京③一九五二〇八
電話東京（265）七二二（大代表）

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　新興印刷・本間製本
0193-125606-0946(3)

五番町夕霧楼

水上　勉

一

京都の古い遊廓として栄えた西陣の五番町で、かなり名のとおった夕霧楼の主人である酒前伊作が、疎開先の与謝半島の突端にある樽泊という村で急逝したのは、昭和二十六年の初秋である。酒前伊作は、終戦の年の春ごろから、京都が空襲を受けるものときめて、夕霧の商売に見切りをつけて、単身で与謝の生家へ帰っていた。

伊作はすでにそのころから、持ち前の神経痛がひどくなりはじめていて、馴れない畑仕事の辛労の上に、食糧難の耐乏生活もあってか、すっかり軀を弱らせていた。しかし、強情な伊作は、無人のまま捨てていた生家の屋根をふきかえたり、根太のくさった建て具をやりなおしたりして、古家を小綺麗な家につくりかえていた。人手に渡っていた田畑もとりもどして、老後を樽泊で送ろうという心算だったらしい。

自給自足の体制がようやくにしてととのったところへ、敗け戦と決まった。伊作は大きく落胆した。燈火管制もなくなり、世の中が嘘のような平和にもどると誰もが都会へ帰ってゆくのに、伊作だけは、部落にのこって京都へ帰ろうとはしなかった。

死因は持病の神経痛に、栄養失調からくる脚気が昂進したためだった。六十七という年齢も、病気に対する抵抗力をなくしていたといえたかもしれない。

その日の朝、伊作は、いつものように海岸へ散歩にゆくといって、村を出て、だらだら坂にな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

った村はずれの石ころ道を下りていったが、遠くに経ヶ岬の燈台のかすんでみえる海が、うす墨を刷いたように灰いろにひらけてみえる崖の上の平坦地で、急に咽喉がつまるような圧迫をおぼえてしゃがみこみ、そのまま村人にかつぎこまれた。その時は、もう元気がなく、とろんとしたうつろな瞳を周囲の者にむけて、

「おかつをよんでくれ、おかつをよんでくれ」

と力のない声で二どいった。

おかつというのは、当時、五番町に残っていて、夕霧楼をきりもりしていた当年五十三になる伊作の最後の女のことである。伊作は死ぬ七年ほど前に本妻のかな江を高台寺の家で亡くしていたが、それからは正妻をむかえず、二号であったかつ枝を夕霧に入れて差配させていた。

若いころから女道楽をした伊作は、どの女にも子供がなかった。戦争のためとはいうものの、晩年を与謝の在所で送らねばならない境遇になってみると、もうこのまま村で余生を送りたくなったという気もちもわからぬでもない。しかし、死に際に会っておきたいと思った身内はやはり京の女、二号のかつ枝しかなかったわけであった。

与謝から京の五番町へ電報が打たれた。夕霧のかつ枝が、久子という古くからいる妓を供につれて、樽泊へかけつけてきた時は、伊作はそれでも息をひきとる三十分ほど前であった。

「あんた」

とかつ枝は伊作の寝ているふとんに膝をすりよせ、しめったタオルで伊作の顔をふきながらいった。

「あんたは京は焼ける、きっと焼けるといいづめやった。せやけど、マッカーサーさんは京だけは空襲せんとそのままにしておいてくれはりましたンどすえ。夕霧もな、あんた、また商売がでけるようになりました。……久子はんも、照千代はんも、雛ちゃんもみんな挺進隊からもどってきてくれはって、えろうにぎやかになりましたえ。新しい妓ォもふえて……昔のようになりましたさかい、いっぺんあんたに来てもろて、見てもらお思うてました矢先やのに……」

涙ぐんでかつ枝がいうと、伊作はうす膜のはったとろんとした眼をわずかにひらいて、

「そうか、おかつ。そんだけ夕霧はにぎやかになったか」

と、とぎれとぎれにいい、大きな安堵感が襲ったものか、にんまりと草色の口角をほころばせた。そうして、かつ枝の横に太った臼のような軀を横ずわりにして、汗をかき、神妙に控えている妓の脂ぎった顔をみた。

「久子か」

と伊作はいった。苦しそうであった。それだけいって、そのまま眼をつぶった。かつ枝と久子が枕元をはさむようにして軀をせり出し、名を何どもよんだが、二どと伊作は口をひらかなかった。孤独な最期といえた。

伊作の枕もとには血の通わない遠縁の者たちが四、五人坐っていたが、どの男女も、かつ枝と久子の顔をじろじろみつめているだけで、座敷の間は妙な違和感のする空気がながれた。

かつ枝は、伊作と一しょになる前は、同じ西陣の上七軒で芸妓をしていただけあって、五十三だというのに、まだ、若々しい色艶の出た白い顔をしていた。小鼻のゆたかにふくらんだ造作の

ととのった顔だちで、豊満な軀をしていた。こんな女を、二号にしたままで、夕霧の名義も呉れてやった伊作が、どうして正妻に迎えなかったのかと、死んだ当人を前にして、その了簡を理解しかねる村人もいたほどだった。

実は伊作は生涯、自分がえらんだ妓楼経営に、不本意な気もちをいだきつづけていた。樽泊へ帰っても、村の連中には、くわしい京都での事業については何も喋らなかったし、封建色の濃い小さな部落だったから、そのような、女を売買するあざとい水商売を嫌う慣習もあったのである。村人の中にはうすうす伊作の商売を知っていてよく云わない者もいた。

しかし死んだ伊作の父母たちは、永年伊作の送金する生活費で、この樽泊で余生をおくり、それぞれ七十を越えてから死んでいた。村を嫌った伊作が若年に京へとび出ていって、えらんだ職業が妓楼であったわけである。

戦争という理由もあって、藁屋根の軒のひくい家へ帰ってきて、父母たちの死んだ床の間にいま枕をむけ、同じ恰好で息をひきとった姿には、孤独な伊作の生涯が現われていたともいえた。あの世から爺婆ァがよびよせたンだと、いう者もいたほどである。

かつ枝は、どことなく冷たい空気のする酒前家にのこって、伊作の葬式をひとりで取りしきった。菩提寺の浄昌寺の墓地に骨をおさめて京へ帰ったのは二日後だったが、その出発する前夜のことである。新仏の位牌を生家の仏壇にまつり、別れの香を焚いている時、入口の低い木戸を静かにあけて、しのび込むように入ってきた村男がいた。

「ごめん下さりませ。夜分に出ましてまことに相すみませんが、奥さんにお目にかかりたいの

でございます」

と、男は鄭重な物言いで、土間に立ってぺこりと頭を下げていた。痩せた細い顎に無精髭を生やしている。みるからに近在の百姓男と思われた。

応対に出た久子が、男の背後をみると、そこに十九か二十の、すんなりと背ののびた娘が、利発そうな顔をむけて立っている。久子はウチワのような平べったい顔の眉をうごかして娘をじろっとみた。

「奥さんはいつご出発でございますか。ご出発までに、ぜひともお願いしたいことがございましてなア……」

と男はまたぺこりと耳までかぶさったバサバサの頭を下げた。久子は奥の部屋へ走りもどった。客の模様をかつ枝につげると、かつ枝も首をかしげながら居間へ出てきた。土間をみると知った顔ではなかった。とにかく、父娘とおぼしい二人の客を、うす暗い十燭光の裸電球の下へ通すことにした。坐るなり男はいうのだった。

「わしは、樽泊の北にございます三つ股の在で木樵をしております、片桐三左衛門という者でございます。じつは、ここにつれてきましたゆうをな、奥さんにあずかってもらえないかと思いまして、まいりましたのでございます……。夜分のお取り込み最中にお願いにあがって、申しわけございません」

かつ枝は久子と顔を見あわせて思わず息をつめた。まず父親の顔と、そのうしろで、木綿の絣のきものをきて、メリンスの黄色い三尺帯をしめ、きちんと襟をかきあわせて坐っている娘をみ

た。

すんなりと坐高の低い娘である。顔は父親に似て、細面だが、難をいえば、少しつり上ったような眼をしているだけで、鼻も口も、造作は概してととのっていた。美人というほどでもないが、素直な田舎娘らしい佳さが感じられた。

かつ枝は息をのんでから、

「あたしにあずけるって……そのお娘さんを、京へつれてっておくれおいやすんどすか」

と三左衛門に訊いた。

「へえ、いいにくいことでござりますけれど、奥さんがここへお帰りになっていらっしゃると聞きましたもンで、娘ともようく相談して、まいりましたようなわけでござります。……どうぞ、ひとつ、よろしゅうお願いしとうござります」

父親は無精髭へ落ちかかりそうになった洟をすすりあげ、うしろの娘をふりかえった。ゆうとよばれた娘はこっくりうなずいて、おびえたような視線を、かつ枝の方にチラと投げ、すぐまたうつむいた。

「あたしにあずけるって……あたしが、あんたはん、どんな商売してンのか、よう知ってはるンどっしゃろな」

と、かつ枝は娘の顔をみながら訊いた。

「そんなにええ商売でもおへんえ……世間さまが指ささはる商売どすえ」

かつ枝はいくらか皮肉をこめていったのだ。すると父親はしょぼついた眼をすえて、

「みんな承知しておりますねや。じつは、うちには、この娘ォの下に、まだ娘が三人もおりますねや。……甲斐性もないのに、女の子ォをごろごろと産みましてな……ゆうは長女でございますわいな。この娘の母親が去年の暮れから病身なもんで畑仕事ひとつせず、病院通いをしておりますんで、いろいろと銭が要るンでございます。それでな、いっそ京へ出して、何か仕事でもおぼえさそうと思うとったのでございますが、どこへおたのみしてもそんな口はございません。即座の銭になるためには、やっぱり、水商売じゃないといけんという者もおりましてな……ちょうど奥さんがお帰りになってるときいたもんですさかい、大急ぎでたのみにきたわけでございますわいな」

かつ枝は、三左衛門の話が両方の意味に聞きとれる気がした。京へつれていって、どこか、ほかの仕事をさがしてくれという意味なのか、それとも、五番町の家で女中にでもつかってくれという意味なのか、判断しかねていると、父親はいった。

「何もかも覚悟しておるとゆうはいいます。奥さん、ひとつ、この娘ォの軀をあんたはんに、おあずけいたしますよってに、好きなようにお使い下さりませんでしょうか」

細い人の好さそうな眼をしょぼつかせて、懇願するようにいうのだった。この父親は、そんなにまだ老けてはいない。四十を出てまもない年ごろと思われるのに、声にも、眼つきにも生来の気弱さが出ていた。

「お母はんがわるいて、どないしやはりましたん……」

「へえ、血ィの道どすやろか。それに、ここがな、（と三左衛門は左肺の上部に手をあてた）大

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けな空洞がでけておりますねや。熱が出て、寝たり起きたりで、医者も、ご馳走をたべて、ぶらぶらせんことにはなおらん病気やいいますさかいな、わしらの家では、もうたいへんなゴクツブシの病気でござりますわいな」

肺病で寝ているということがそれで知れたが、かつ枝は、いつかこの樽泊へきた時に、伊作の口から、与謝は雨の多いところで、部落の日陰の家には、かならずのように肺を患った人が寝ているということをきいて、眉をしかめたことを思いだすのだった。

「へーえ、そらお気の毒どすな。ほれで、下に三人のお娘はんちゅうと、おいくつにならはりますねん」

「へーえ、この娘ォの下が十六。つぎが十三、そのつぎが七つですねや。十六の娘ォはこの春、中学を出ましてな、綾部の靴下工場へ糸繰りにいって、寄宿舎住いをしておりますけんども、まだまだ、銭を稼ぐというところへは、いっとりません。見習女工ですよってンな」

「ほれで、あんたはんのおうちは、田圃やら畑やらはあらしまへんのどすか」

「へえ、昔はちいとばかりの田畑はござりました。けんども、先代も病身でござりましてな。やっぱり、先代も舞鶴の病院で長いこと寝たあげくに死にましたンどすが、入院費やら薬代に、ありもしない身代をすっかり失くしてしまったのでござります」

「あんたが、そのお人のお子さんで」

「へえ、下に弟がいましたが、これも、大阪ィ丁稚にいっとりました。せやけど、二十七の年にようよう年季があけるちゅう年になって、船場の問屋で死んだのでござります。運のわるい家

筋ですねや。せやけど、奥さん、ゆうはええ娘ォどすねや。これまでに病気ひとつしたこともおへんしな。学校も成績はええ方でございましたし、父親のわたしがいうのも何でございますが、性格もおとなしいええ娘でございます」

かつ枝は哀れをおぼえた。なるほど父親のいうとおりにちがいないと思えた。ゆうというその娘は十九だというのに、一見して勝気なものは微塵もかんじられない。器量のいい娘に似あわず、どこかしょんぼりとした、おとなしすぎるほどの佳さがあって、強いていえば影のうすいようなところがほのみえる。これは父親の気弱な性格をうけているせいかとも思われたが、顔いろも白くて、それは病身なために白いのではなくて、地肌らしかった。生毛の生えた耳たぶにも、ふくよかな襟首のあたりにも、娘々した健康なものも感じられる。

「ゆう子はんいやはりますのんか。どんな字ィかかはりますねん」

かつ枝は娘へ視線をあてたままで訊ねた。娘ははじめてこの声をだした。

「へえ、夕方の夕をかきますんどす」

あどけない声であった。父親が、あとをひきとるようにしてこたえた。

「名前は浄昌寺の和尚さんにつけてもらいましたンどすねや」

浄昌寺というのは伊作を葬った樽泊の菩提寺の名であった。かつ枝は、ゆうこと口の中でつぶやき、夕という字は夕霧の夕だとすぐ思いなおした。この娘なら、五番町の夕霧につれ帰って表に立たせても、決してひけはとるまい。今日からでも客は殺到するだろうと思われた。

八人もいる娼妓たちの顔を、即座にかつ枝は頭にチラとならべてみて、これはたいへんな上玉

を拾って帰ることになったと瞬間思った。しかし、よく考えねばならない。世間を知らない小娘のことでもあるし、父親の三左衛門も、木樵をして山へ入って暮しているのだから、娘を京へ出したいといっても、いったい、娘がどのような生活をおくるのか、はっきり納得させておく必要があった。かつ枝はずばりといった。

「終戦後は、昔のように、借金で軀を売らはって、稼いだお金を抱え主さんにみんな取られてしまわはるちゅうようなことは、あらしまへんよってにな。はじめから割り切って、うちらの店へおつとめにおいでやす娘はんもいやはるようになりました。そうやさかい、何も、つらいところへ身売りしたちゅう感じはおへんのどっせ。せやけど、世間はちがいますな。みんなええ目でみやはらしまへん。まるで人間の屑みたいに思うていやはりますねん。せやけど、人さんのいわはるほど、つらいとこやおへんのどすえ。兵庫県の三木から来てはる雛ちゃんの世話で、これもやっぱり三木のお百姓さんからきやはった松代ちゅう娘はんがいやはりますねやけど、この娘ォは二十一どすねや。生娘でうちへ働きに来やはりましたんどすけど、器量のええしんしょうのええ娘さんどすさかい、ええお客はんがぎょうさんつかはりましてな、今では、あんた、おあそびやら、お泊りやらのお客はんがひっきりなしで、一日お茶ひかはったことあらしまへん。そうどすな、月に、三、四万は稼がはりまっしゃろ。うちへ来て二年どすけど、えらい羽ぶりどすねや。兵庫の家にはお父さんもお母さんもいやはりますけど、二人とも左ウチワどすしな。松代ちゃんのお部屋には電蓄も、洋服ダンスも、ええラジオもおますしな。みんなじぶんの甲斐性でつくらはりましたンどすさかい大きな顔どす。考えようによっては、あんたはん、まじめなとこへゆこ

いうて、京へ出やはったはええけど、すぐにまじめなとこやめてしもて、橋下やら、木屋町のドングリ橋あたりで、パンパンしてはる娘はんはいくらもいやはりますえ。そんなことしたら、わるい男はんにひっかかって、何にもならしまへんがな。軀をしゃぶりとられたあげくの果てに、捨てられてしまうのンが関の山どす。そんなこと思うたら、うちらアの商売は法律がみとめてるンどすさかいな、月々にお医者はんの検診もありますし、安全どす。お客さんも安心して上ってくれはります。それでいて、あんた、頭がいたいいうて休みたかったら、みんな自由どすさかいな。無理して働かんでもよろしねや。下宿代払うて、うちにおいやすンどすさかい、好き勝手にして暮せるンどっせ。今はもう、娼妓さん本位の廓の制度になりましたンどすえ」

三左衛門のしょぼついた眼に光がやどった。かつ枝は精一杯切れ長の眼をなごめて三左衛門をみた。

「そら、なかなかようして下さりますのやな」

と三左衛門はつぶやくようにいったが、うしろをふりかえって、娘をみて、

「どうや、今のおはなしのとおりやな。お前、決心してゆくか」

とたずねた。抱え主の前で父親が因果をふくめるようなひびきが出ている。しかし、夕子という娘はこっくりうなずいて、うつむいたままいった。

「あたい、もう決心してますのどす。どこで働いてもええんどす。奥さんさえよろしかったら、どうぞ、わたしをつれてって下さい」

かつ枝は久子の顔をみて、瞬間、あきれたような、嬉しいような眼をした。

「お父はんも、御承知の上でそうお云やすのどしたら、ほんなら、夕子はんをおつれしますわ。当分、きものやら、何やかやお金がかかりますさかい。出来ることやったら、うちもさしてもらいますし、今は、昔とちごうて、娼妓はんの組合が出けるちゅう噂どすさかいな、それが出来ますと、お金も安い利子で貸してもらえるちゅうようなことにもなる噂どすし、お母はんのご病気で、お金が入用でしたら、ぎょうさんはでけしまへんけど、私も京へ帰ったら、相談してみて、お立替えはできるだけしたいと思います」

かつ枝は真実そんな気もちになっていた。すると、父親は瞼をにじませて礼をのべた。

「ほんなら、奥さん、よろしゅうたのんます」

何ども頭を下げた。娘をつれてこの父親はやがて暗い夜道を帰っていった。

かつ枝は偶然とはいいながら、思いがけない新しい妓が見つかったことで上気した。じっさい、夕霧楼を再開したといっても、働いてくれる妓が少ないために困っていた。八人の妓はいるけれど、広い館はまわしをとってもあまるほど空部屋がある。

妓が財産の商売であってみれば、鉄の草鞋をはいても新しい妓がほしかった。そのためには、かつ枝はどれだけ苦労したかしれない。ツテを求めて岐阜や、名古屋へも娘のはなしがあると旅をした。かつ枝は父娘の帰った戸口をしめて部屋にもどると、久子にいった。

「えらい拾いもンをしたことになったなア、久子はん。あの娘ォやったら、えらい稼ぎ手にならはるわ」

久子はきょとんとした眼を向けて、まだ半信半疑の顔をしていたが、

「ほんまどすな。お母はん。やっぱり、与謝へ戻らはって、ええことがおましたな。これも、みんな、お父はんのめぐりあわせやおへんやろか」

仏がそのようなお土産までもたせて帰してくれるのかと、かつ枝は正直のところ伊作の位牌に合掌したい気がした。かつ枝は奥座敷へひきかえすと、仏壇の消えた蠟燭に火をつけ、チンと小鈴をならした。手を合わせたかつ枝は、眼をつぶって唱えるようにいった。

「なんまんだぶ、なんまんだぶ、なんまんだぶ。あんたはん、夕霧はまた、ひとりええ妓ォが来てくれはることになりましたえ。ありがとうございます。あんたはん。なんまんだぶ、なんまんだぶ……」

かつ枝はいつまでも、仏壇の前に立てられた正覚院浄明居士という位牌をにらんで坐っていたが、やがて、立ち上ると、仏壇にならんでいた二つの位牌のうちの白木の方を、スーツケースにしまいこんだ。早立ちの朝にそなえての、荷造りをはじめたのである。

翌朝、片桐夕子は、父親の三左衛門と、二人の妹におくられて、早や早やと樽泊の家にきた。夕子は、昨夜の身装に紅い鼻緒のおろしたての下駄を履き、素足の指をちぢめるようにして、表の柿の木の下に立って、ぺこりと会釈をした。わきに二人の背のひくい少女が浅黒い顔をひきしめて立っていたが、二人とも夕子に似て眼がつり上っていた。

夕子は柳であんだ古い手提と、風呂敷包みを両手にさげていた。明るい朝の光線の下でみると、昨夜、電燈の下でみた時よりは、はるかに夕子は垢ぬけしてみえた。かつ枝はかすかに裏切られ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com